

漂着地にて

作業員 1

作業員 2

作業員 3

散歩者 1

講師

受講者 1

受講者 2

その他、ワークショップの受講者たち

砂浜海岸・入り江

波の音が聞こえている。

波打ち際から少し登ったところ。大型の水棲生物が打ち上げられている。

横たわったその生き物の大きさは、マイクロバスと同じくらい。或いはそれ以上ある。

その生き物は、すでに息をしていない。

作業員たちが、生き物の周りにいる。

作業員 1 と 2、メジャーを使って、その生物の頭部先端から尻尾までの長さを測定している。

作業員 3 は、生き物の表皮をなでている。表皮の凹凸を観察するような触り方。

もう片方の手に、記録用紙の挟みであるバインダーを抱えている。

作業員 1 「頭部先端から尾鰭分岐部の長さ。えー。7m74 cm」

作業員 3 「はい。7m74 cm。了解です」

作業員 3、記録用紙に数値を書き込む。

作業員 1 「8 はなかったな」

作業員 2 「でもやっぱでかいですね」

作業員 1 「このサイズ初めて？」

作業員 2 「7半いったのは初めてです」

作業員 1 「そっか。初めてか」

作業員 3 「あの。次いいですか？」

作業員 1・2 「(気づいて) どうぞ」

作業員 3 「じゃあ、つぎ。口の先から口角の後ろ端までの長さ、お願いします」

作業員 1・2 「はい」

作業員 1・2、測定する。

散歩者 1 が砂浜を歩いてくる。水棲生物を見つける。

散歩者 1、ゆっくり近づきながら、時折立ち止まって眺めてみたりする。

作業員 1 「えーと。上顎先端から口角後端、1m97 cm」

作業員 3 「はい。1m97 cm、了解です」

作業員 1、口の端についた傷に触ってみる。

作業員 3、記録用紙に数値を書き込む。

散歩者 1、作業員 3 に近づいていく。

散歩者 1 「あの」

作業員 3 「はい」

散歩者 1 「死んでるんですか？」

作業員 3 「はい」

散歩者 1 「やっぱり」

作業員 3 「発見された時、もう息してなかったんです」

散歩者 1 「残念ですね」

作業員 3 「ええ」

作業員 1・2、黙って作業員 3 を待っている。

作業員 3 「(気づいて) ちょっとすみません」

散歩者 1 「あ。はい」

作業員 3 「すみません、次、いきます。次、頭の前から噴気口の真ん中までの長さ」

作業員 1・2 「はい」

作業員 1・2、測定を始める。

散歩者 1 「なんていうクジラですか？ これ？」

作業員 3 「ちょっと、まだわかりません」

散歩者1 「そうなんですね」
作業員3 「判定が終わってないので」
散歩者1 「判定ってこれ？ いま、やってる？」
作業員3 「これは測定です」
散歩者1 「これは測定」
作業員3 「判定はその後です」
散歩者1 「判定はこの後」
作業員3 「そうです」
散歩者1 「そういうもんなんですね」
作業員3 「なんていうか。…はい」
散歩者1 「そっか…」
作業員3 「それにこれ、まだクジラかどうかはつきり言えません」
散歩者1 「え？ そうなんですか？」
作業員3 「はい。この生き物について、正確な事はなにも」
作業員1 「(少し声張って) 記録、いい？」
作業員3 「あ、はい。お願いします」
作業員1 「頭部先端から噴気口中央、1m68 cm」
作業員3 「1m68 cm、了解です」

作業員3、記録用紙に数値を書き込む。
作業員1、噴気口の中を覗いてみる。
作業員2、作業員1に近づいていく。
作業員1、噴気口の中を指差す。
作業員2、噴気口の中を覗いてみる。
その生き物の噴気孔の中は、ひどいにおいがする。

散歩者1 「あの」
作業員3 「なんですか」
散歩者1 「やっばこれ、クジラにしか見えませんが」
作業員3 「専門家が判定します。それで決まります」
散歩者1 「専門家？」
作業員3 「はい」
散歩者1 「(作業員3を見て) あなた、専門家ですか？」
作業員3 「違います」
散歩者1 「(作業員1、2を見て) 誰が専門家ですか？」
作業員3 「まだ来てません」
散歩者1 「ああ。これから」
作業員3 「(腕時計を見る) たぶん、もうちょっとしたら来ます」
散歩者1 「その人が来るまでは、わからない？」
作業員3 「なんていうか。…一応、それが規定で。決められてるので」

散歩者1、生き物を眺めてみる。

散歩者1 「(笑って) じゃあこれ、いまのところ未知の生命体ですね」

作業員3 「はあ？」

散歩者1 「だってほら。まだわからないんですよ？」

作業員3 「わからないっていうか…」

散歩者1 「確定してないんですよ？」

作業員3 「えっと。なんていうか。…まあ、そうですね」

散歩者1 「ほら。ってことはやっぱり、知られざる生き物じゃないですか？」

作業員3 「ちょっと、ごめんなさい。次、測るんで」

散歩者1 「あ、はい」

作業員3、半歩前に入る。

作業員3、記録用紙を確認して、

作業員3 「次は、頭部先端から目の真ん中まで」

作業員1・2 「(気づいて) はーい」

作業員1・2、測定を始める。

メジャーをうまく張れず、何度かやり直す。

散歩者1、何か話しかけようとするが、やめる。

散歩者1、作業員3から離れていく。

作業員1、作業員3を見る。

作業員1 「大丈夫？」

作業員3 「(気づいて) え？」

作業員1 「(散歩者1を示して) なんか言われた？」

作業員3 「ああ。大丈夫です」

作業員1 「なんて言われたの？」

作業員3 「…なんていうか。(生き物を示して) これ、未知の生命体ですかって」

作業員1 「このクジラが？ 未知の生命体？」

作業員3 「えっと。なんていうか。…はい」

作業員1 「これマッコウクジラだろ？ どう見ても？」

作業員3 「そう。…ですね。はい」

作業員1 「クジラ以外のものに見える？」

作業員3 「見えませんね」

作業員1 「だろ？ やだなあ、変な妄想して」

作業員 3 「本当ですね」
作業員 1 「(散歩者 1 を見て) 変な書き込みとかしないよなアイツ」
作業員 3 「書き込みですか？」
作業員 1 「福島の海岸に未知の生命体が漂着してた件…みたいなさ」
作業員 3 「嫌ですね」
作業員 1 「最低だろ？」
作業員 3 「最低ですね」
作業員 1 「他に変なこと言われてない？」
作業員 3 「…いえ、大丈夫です」
作業員 1 「(散歩者 1 を見て) ちょっと俺、言ってこようかな」
作業員 3 「構わないで、記録続けましょう」
作業員 1 「(思い直し) そうだね」

作業員 3、記録用紙に目を落とす。

作業員 1 「…頭部先端から眼中央まで、2m24 cm」
作業員 3 「2m24 cm、了解です」

作業員たち、そのまま生き物の測定と記録を続ける。

* * *

測定の順番は…

- ・ 頭部先端から胸の鰭までの長さ
- ・ 頭部先端から臍までの長さ
- ・ 頭部先端から生殖器までの長さ
- ・ 頭部先端から肛門までの長さ
- ・ 胸の鰭の最大幅
- ・ 胸の鰭の頭側の長さ
- ・ 胸の鰭の尻尾側の長さ
- ・ 尾鰭の幅
- ・ 尾鰭の分岐点から尾の付け根までの長さ

さらに、メジャーを使った測定の後は歯の数を数える。
埋没している歯に注意するため、歯の数は必ず2回以上数えること。

続いて、写真撮影。全体像と、各部位のアップ。
写真撮影は作業員 3 が行う。
写真撮影が始まったら、作業員 1 と 2 は、駐車場の方へ去っていく。

作業員3は、写真撮影を終えたら、皮膚の一部をサンプルとして採集する。
足元に置いてあるバッグから、標本瓶と、棒状の検体採取具を出す。
採取具を皮膚に突き刺して、サンプルを採取する。

* * *

散歩者1、生き物から遠ざかる。
砂浜に横たわっている流木を見つけて、腰掛ける。
測定の様子をぼおっと眺めている。

ワークショップの講師が海岸の波打ち際に沿って歩いてくる。
続いて、受講者たちも歩いてくる。バラバラに散らばって歩いてくる。

受講者たちは、海の底を歩くかのように、ゆっくり、ふらふらと、ゆらゆらと歩いている。

皆一様に、うつむいて、なにかを探るように歩いている。
時折、思い出したように顔を上げるが、またすぐに下を向く。

講師も受講者たちも、横たわっているはずの水棲生物には、気づかない。
それどころか、水棲生物が横たわっているはずの空間も、素通りして踏みこえていく。
作業員たちにも気づいておらず、作業員たちのすぐ脇をとおっていく。

作業員たちのほうでも、講師と受講者には気づかない。
自分たちのペースで、それまでと変わらず生き物の測定を続けていく。

講師が、砂浜に落ちていたビールの空き瓶を拾う。
瓶の砂を落として、色落ちした瓶のラベルを見る。オリオンビールである。
講師、オリオンビールの瓶を握って確かめる。
講師、周りの受講者たちをひとわたり眺める。

講師「(声張って) みなさん。ここらへんでいったん集合しましょうか」

ぱらぱらと講師のもとに集まってくる受講者たち。
受講者たち、講師の周囲に半円を描くように集まる。
講師、受講者たちが集まったのを見定めて、

講師「今日は、早くからお集まりいただきありがとうございます」

講師、受講者たちに向かって軽く一礼する。

受講者たちも、講師に軽く会釈。

講師「えーとですね。…今日の内容については先週あらかじめお伝えしましたが、改めて簡単に説明します。今回はみんなでこの入り江の漂着物を拾ってみようと思います。この砂浜、少し目を凝らしてみると、人工物も、自然物も、本当にいろいろなものがあります。まあこういうものは砂浜にあるよね、つてのも、なんでコレここにあるの？ って、ビックリするような物もあります。そういう漂着物を拾って眺めてるだけでも飽きないんですが、今日はちょっと違うことを試してみたくて。…ここで拾った、ひとつひとつの漂着物について考えてみようと思います。物の来歴について思いを馳せるっていうんですかね。…具体的に言うと、ここで拾った物の、ここに流れ着くまでの物語っていうんですかね。ここに漂着する前はどこにいて、どんな風に過ごしていたとか…。まあ、そういうことをみんなで考えてみましょう。…別に実証しようとしなくていいです。答え合わせじゃないんで、あくまで想像でいいので、想像力を働かせて、みんなで考えて、話し合いたいと思います」

講師、手に持っていた空き瓶を掲げる。

講師「たとえばこの空き瓶。これ。まさにここに落ちてました。このラベル。オリオンビールって書いてあります。これ沖縄のビールの銘柄ですね。これとか、どうですかね？ さすがに沖縄から海流に乗って流れてきた、ってことはないかもしれないですけど。沖縄でビール買って、ここで空けて。ウハーうめえって、飲んだ人がいるかもしれない。あとは…そうだな。オリオンビールって結構こっちの方でも出回ってるから、この辺りにある沖縄料理屋さんで飲んでた人たちが、そのまま持ってきちゃったとか。そういう感じですかね」

受講者1「オリオンビール、そこのコンビニで売ってますよ」

講師「え？ そうなんだ？ (笑って) じゃあ、そこのコンビニで買って、ウハーうめえ、って飲んだのかもしれない。…まあ結局、そこが妥当な線ですね」

受講者のうち、数名が軽く笑う。

講師「でも、別に妥当な線で落ち着けなくていいんです。もっと膨らましていい。あのこれ、負け惜しみとかじゃないですからね (笑う)」

受講者たち笑う。笑わないものもいる。

講師「大事なのは拾った物自体に聞いてみて、なにかに気づいて、想像することです。現実的なパースペクティブっていうか、設定みたいなものより、拾った物それ自体との関係性が大事なんですね。逆に言うと、そういう関係性が築けるもの、築けそうなものを拾ってください。…じゃあ、とりあえず30分くらい。探してみましようか」

受講者たちがゆっくりと散会し始める。

講師「あのひとつだけ。危険物はやめてくださいね。怪我しそうなものや、健康に害がありそうなものは拾わないでください」

受講者たち「(それぞれ) はい」

受講者たち、バラバラになって、海岸を歩いていく。

受講者1が、講師へ、

受講者1「危険なものとは危険じゃないものは、どう判断すればいいですか？」

講師「え？ それは…それぞれの判断に、任せます」

受講者1「危険かどうか、判断に迷ったらどうすればいいですか？」

講師「そうですね。…私に聞きに来てください」

受講者1「それでも迷ったらどうしますか？」

講師「一体、なに拾おうとしてるんですか？」

受講者1「なにに興味を惹かれるか、わからないから聞いてるんです」

講師「そうですね。…ともかく、迷ったら聞きに来てください」

受講者1「わかりました」

受講者1、海岸を歩いていく。

講師、瓶ビールを持ったまま海岸を歩き始める。

作業員3が、皮膚のサンプルをバッグにしまっている。

皮膚のサンプルについて、記録用紙に書き込む。

すると、作業員1と2が、シャベルを持って駐車場から帰ってくる。

作業員2はシャベルを2本持っている。

作業員1「電話つながったよ」

作業員3「なんて言っていました？」

作業員1「埋却でいいって」

作業員1、シャベルを掲げる。

作業員3「え？ こんなに大きいのは、私たちが埋めるんですか？」

作業員1「いやいや。ショベル来るの遅くなりそうだから、それまでやっとうと思っ」

作業員3「研究員の人は？」

作業員1「ショベルと一緒に来るって」

作業員2、作業員3にシャベルを渡す。

作業員3「ありがとう」

作業員3、受け取る。

作業員1・2、シャベルで砂を掘り始める。

生き物の周りの砂を崩すように、生き物の外側に堀を作るように、掘っていく。

作業員3、その様子を見ている。

やがて、自分もシャベルで周りの砂を掘り始める。

散歩者1、流木に腰掛けている。

うつむいて歩いていた受講者2が、流木に腰掛けている散歩者1に気づく。

散歩者1の後ろから近づいていく。

受講者2、散歩者の見ている方向を見してみる。その先には作業員たちがいる。

受講者2には何も見えない。

受講者2「なに見てるの？」

散歩者1、振り返る。

散歩者1「ああ。来てたんだ」

受講者2「うん。ワークショップ」

散歩者1「ワークショップ？」

受講者2「そう。この間話してたやつ。覚えてる？」

散歩者1「(思い出す) ああ。なんか言ってたね。物を拾ってなんとかって」

受講者2「うん、それ」

散歩者1、あたりを見渡す。

散歩者1「それでみんな歩いてるのか」

受講者2「そっちは散歩？」

散歩者1「うん」

受講者2「体の具合、よくなった？」

散歩者1「うん。最近は全然問題ないんだ。よく眠れるし」

受講者2「よかった」

散歩者1「うん」

受講者2「さっきから、なに見てたの？」

散歩者1「見てた？」

受講者2「うん。さっきからじっと、向こうのほう」

受講者2、水棲生物の横たわっている方向を指さす。

受講者2 「ずっと見てたよ」
散歩者1 「そっか」
受講者2 「うん」
散歩者1 「ただぼーっとしてただけじゃないかな」
受講者2 「そっか」
散歩者1 「特に理由はない気がする」
受講者2 「ふうん」

二人、黙る。

受講者2 「ねえ」
散歩者1 「なに？」
受講者2 「いつだか、ここでクジラが死んでた話、したでしょ？」
散歩者1 「そうだったっけ？」
受講者2 「あれ？ 言ってたよね？」
散歩者1 「いや。クジラの話はした」
受講者2 「そうだよね」
散歩者1 「それって、ここだったっけ？」
受講者2 「あれ？ ここって聞いたけど」
散歩者1 「そっか」
受講者2 「違うの？」
散歩者1 「いや、ここだった気もしてきた」
受講者2 「覚えてないの？」
散歩者1 「いま思い出す」

散歩者1、黙る。

受講者2、黙って見ている。

受講者2 「どう？」
散歩者1 「いま思い出すから」
受講者2 「ちょっと歩いて、戻ってくる」
散歩者1 「…うん」

受講者2、海岸を歩いていく。

散歩者1、少し間を空けて、受講者2の後についていく。

二人、そのまま一緒に歩く。

講師、歩くうちにふと水棲生物に気づく。

その周囲にいる受講者たちも気づく。
講師と受講者たち、水棲生物を遠巻きに取り囲んで眺める。
しかし、それが気のせいだったかのように、また、散会する。漂着物を探し始める。

砂を掘り続けている作業員 1・2・3。

作業員 3 「(掘りながら) ちょっと疑問に思ったんですけど」
作業員 1 「なに？」
作業員 3 「これ、たまたま岸にたどり着いたじゃないですか」
作業員 1 「うん」
作業員 3 「それで埋められるじゃないですか」
作業員 1 「そうだよ」
作業員 3 「でも、クジラが全部、流れ着くわけじゃないですよ」
作業員 1 「もちろん」
作業員 3 「海で死んだクジラってどうなるんですかね？」
作業員 1 「そりゃ、底に沈むんだろ」
作業員 3 「その後は？」
作業員 1 「プランクトンとかの餌になるんだろ？」
作業員 3 「その後は？」
作業員 1 「たぶん、骨だけ残るんだよ」
作業員 3 「骨はどうなるんですか？」
作業員 1 「骨は残るだろ？」
作業員 3 「ずっと残りますかね？」
作業員 1 「まあ、そのうち分解されるかもしれないけど」
作業員 3 「そっか」
作業員 1 「なにが気になるんだよ？」
作業員 3 「いや。なんていうか。…どうなるんだろって思っただけです」

作業員 1 と 3、黙って掘る。

作業員 2 「鯨骨生物群集って呼ばれるものがあります」

作業員 1 と 3、手を止めて作業員 2 を見る。

作業員 2、掘りつつ、

作業員 2 「深海の底にクジラが沈むと、その死骸にプランクトンが集まってきます。だんだんその集団が大きくなってきて、コロニーが形成されます。…そうすると、プランクトンを食べる生き物が集まってくる。クジラの骨は生き物が定着するのに適しています。障害物として隠れやすい。深海の生き物にとっては住みやすい環境なんです。…だから、深海では、クジラを基に新しい生態系が生まれます」

作業員2、掘るのをやめて、一息つく。

作業員2、ふたたび掘り始める。

作業員2「深海の世界で、それは結構インパクトがでかいらしいです。そもそも生き物が少ないですから。突然、あそこに街が一つできた。…みたいな。そんな感じらしいです」

作業員2、黙って掘り進める。

作業員1と3、顔を見合わせる。

作業員1、ふたたび掘り始める。

作業員3、シャベルを砂に突き刺して、生き物に近づく。表皮を触ってみる。

作業員3「こいつは、街になり損ねたのかな」

作業員2「(掘りつつ) それは、わかんないですけど」

作業員3「こいつの街を見たかった気もする」

作業員1「こいつが街になってたら、俺たちはこいつのこと知らない」

作業員3「え？」

作業員1「だってそうだろう？ 二つの場所で死ねないだろう？」

作業員3「…そりゃそうだ」

作業員3、シャベルをとって掘り始める。延々と掘っている。

その周りを歩いて、漂流物を探している講師。その受講者たち。散歩者。
海の底を歩くかのように、ゆっくり、ふらふらと、ゆらゆらと歩いている。

皆一様に、うつむいて、なにかを探すように歩いている。

時折、思い出したように顔を上げる。

それぞれのタイミングで、生き物に気づき、気のせいだったかのように元に戻る。

漂うように、歩き続けている。

作業員たち、シャベルの手を休める。

各々、シャベルを砂に突き刺す。休憩するために砂浜を上っていく。

漂うように歩く講師、受講者たち、散歩者。

やがて散り散りになっていく。

波の音が聞こえている。

後には、大型の水棲生物が横たわっているだけである。

その生き物は、横たわったまま動かない。

(終わり)